

「日高六郎先生を偲ぶ会」にて

山内亮史

今年九月と一〇月、続けて京都へ行ってき
た。いずれも日高六郎先生を偲ぶ旅である。
九月二二日、京大楽友会館で六月七日に一
〇歳でお亡くなりになった「日高六郎先生
を偲ぶ会」が開かれた。

参加者は四〇名程度の小ぢんまりした会で
あったが、参加者の顔ぶれはすごく、憲法学
者の樋口陽一、サルトル研究者の海老坂武、
元東大助手の最首悟、経済学者の塩沢由典、
ジャーナリストの吉岡忍、故小田実夫人の玄
順恵、そして故土井たか子に長年連れそった
秘書の五島昌子といった方々である。

樋口氏は日高先生の生き方の「実存的選択」
について語り、海老坂氏は日高先生の著作集
が実現されない日本の出版文化を怒り、最首
氏は先生が先生と呼ばれることを拒否し、「問
学」という精神を大切にしていたと語った。

会のII部、夕食会の献杯の首頭を司会した
旧知の中尾ハジメ元京都精華大学長に指名さ
れ、私は自宅書斎から暢子夫人が描く六〇号
の先生の肖像画のコピーを持参し、日高先生
から受けた諸々の過分な好意について長すぎ
る前置きを述べさせてもらった。

私は、なぜか高校三年のとき、社会学って
格好いいと思い、学ぼうと大学に入ったが、
北大で鈴木栄太郎の助手をしていた日高先生
の東大の初期の教え子であった江澤繁先生が
一冊の教科書を紹介して下さった。古本屋で

手に入れたその本は、日高六郎・福武直著『社
会学・社会と文化の基礎理論』（光文社、一
九五二年初版）であった。

その冒頭は「欲求」から始まっていた。後
にこの構成について先生は、マルクスの『資本
論』の冒頭「商品」に方法的に相当するものと
して考えたと語っている。因みに表紙カバーに
は、清水幾太郎が日高先生の才能を、丸山真男
が福武直の人柄を推薦文として寄せている。

六〇年安保と七〇年安保の間の激しい季節
で、私は様々な思想の意匠の中で揺れ動きな
がらも、「個人の思想の自律を中心において、
そこから出発して新しい協同と連帯をつくり
出す道すじは、まだ決して乗りこえられてい
ないばかりか、むしろその道すじを安直に乘
りこえようとすることは、おそらくなにもの
も乗りこえることができないのではあるまい
か」(戦後思想の出発)という文章を基軸に、
野間宏をして「整理王」といわしめた時代認
識に学び、思想というものが「認識と価値観
と実践意志との微妙な、しかし首尾一貫した
結びつきであり、それを考えぬく態度」であ
るという表現を心に刻んだりした。

私が「戦後思想と戦後教育の普遍性」「日
高六郎教育論集」の意味するもの」という
論文を携えて京都精華大にお訪ねしたのは一
九八〇年代に入ってからである。以後、日教
組教育文化総合研究所での仕事、国民文化会

議の存続問題で共にし、パリではモンパルナ
スを案内していただき、御自宅にお泊りした
だいたりした。また「変わる世界を考える」(筑
摩書房、一九九〇年)という本に私のニュー
ジランド非核運動報告を載せて下さった。

毎日出版文化賞受賞の名著『戦後思想を考
える』(岩波新書)の担当編集者であり、先
生の教え子であった岩波の小川寿夫氏が旭川
に來られ「日高六郎著作集」の編集の相談を
されたことがあった。それをあらゆる分野を
横断した全八巻から成るものとして編んでみ
た。①社会学理論、②マスコミと文化、③戦
後思想論、④憲法と平和、⑤市民と民主主義、
⑥教育論、⑦知識人と思想、⑧歩んできた道
という構成であった。しかし、小川氏は御本
人が消極的と嘆き、計画は頓挫してしまった。
私の無力さを痛感する。

一〇月一三日は京都精華大学五〇周年記念
式典であった。日高先生は東大を退職した後、
一九七六年から八九年までこの大学におられ
た。精華でその後を継いだのが上野千鶴子さん
であったことは日本の社会学の一つの命脈が
ジェンダー研究の補強を得て生き残ったといえ
た。旭川大学はこの大学と「京都学」と「北海
道学」のフィールドを相互に提供し、私も講義
に出掛けたことがあった。そして職員のリ
ーダーだった田所氏は旭川出身であり、漫画学科
創設に尽力した吉村氏は職員サバティカルを利
用し、旭川で私の大学院の演習に参加していた。
日高先生は戦後知識人の「悔恨共同体」の
分化分解を他称進歩的文化人として誠実に生
き切った。五年前に最後に会ったとき、やつ
ぱり日本では政権交代はうまくいかないのか
なア」と仰言った。合掌。

へやまうち りょうじ・旭川大学学長